## 研究機関からの発信

### 子どもを対象とした食生活・栄養に関わる教育等の効果を検証した研究をすすめるために

ーより効果的な方法の開発と共有化、適切な評価を通じて、実践の質の向上を図るー

〈連　携〉実践活動機関（団体）、研究機関（大学）

〈考え方と必要性〉

子どもたちの“食べる力”を育むための支援として、保育所・幼稚園、学校、地域保健機関、医療機関等で、さまざまな取組がなされています。このような取組を、より効果的かつ幅広く行っていくためには、それぞれの施設や実践者等の経験の範囲にとどまらない、普遍的な形での整理と共有化が重要です。また、プログラムの運営・管理という点では、その有効性を適切な手法を用いて評価することが求められています。

昨今、医療サービスの場においては、個々の診断・治療等に関わる意志決定を、ただ単なる“経験”や権威者の意見ではなく、学術論文として刊行された知見を集約して得られるエビデンス（客観的根拠）に基づいて行う“Evidence-based Medicine (EBM)”の考え方が定着しつつあります。子どもに対する食生活・栄養に関わる教育プログラムについては、診療行為等とは異なり、到達目標（エンドポイント）を客観的に捉えにくい面がありますが、個々の実践の場においてではなく、少なくとも研究として、教育プログラムの有効性を質の高いエビデンスとして示す論文が十分に蓄積されることが望まれます。

残念ながらわが国では、この分野において“事例報告”的なレポートは数多くあるものの、厳正な審査を経て学術雑誌に掲載された論文は限られています。そこで、大学・研究機関等の研究者においては、実践の場でのニーズや問題意識に立った、“研究のための研究”ではない、より実践的かつ質の高い研究をさらに進めていく必要があります。また、実践者においては、これまでわが国で行われてきた研究について、その結果のみならず、評価指標や評価方法等を十分理解することにより、日常の実践活動をより深め、評価の視点を持つことができるようになります。さらに、実践者と研究者が情報や価値観を共有し、連携を図ることにより、実践面でも研究面でも飛躍的に向上し、その結果、子どもたちへの支援方策が充実していくことが期待されます。

〈活用の例〉

子どもを対象とした食生活・栄養に関わる教育の効果を検証した研究（いわゆる介入研究）として、学会誌等に「原著論文」として掲載されているものについて文献データベース等を用いて抽出し、実践者が理解しやすいような形で整理をします。特に、「方法」においては、評価という視点から「指標」「研究のながれ」について、また、実際の教育内容（プログラム）について、図表等を加えてできるだけ具体的かつわかりやすく示すようにします。「データの見方一口メモ」を加えることによって、このような評価に関わるデータを正しく理解・活用するためのポイントを示すこともできます。

この文献紹介集については、平成15年度厚生労働科学研究事業報告書（子ども家庭総合研究）「子どもの発達段階に応じた効果的な栄養・食教育プログラムの開発・評価に関する総合的研究（主任研究者　山本茂、分担研究者　吉池信男）」として、紙媒体に加え、検索可能なデータベースの形でも提供予定。